

2000.7/20-23



雲上の鹿島槍相似峰

後立山連峰縦走

爺・鹿島槍・五龍・唐松・白馬



雪溪とお花畑

メンバー>大塚賢一 45才 岸本陽介 27才

計画表

個人装備

・軽アイゼン・ゴアレイン上下・ザックカバー・シュラフ・シュラフカバー・シュラフマット・フリース夏用上下・替えアンダー(ゼロポイント上下・靴下・手袋・パンツ・Tシャツ)・ヘッドライト・トレペ・ブキ・帽子・タオル・サングラス・行動食・水1.5L・行動水・ウイスキー・肴・食料(ジフィーズ6食・ラーメン4食)

共同装備

大塚

・双眼鏡・一眼レフカメラ・三脚・テープレコーダー・ラジオ・高度計・1/50000地図・コンパス・エマージェンシーキット・ゴア2人用テント・テントマット・パーナー・ランタン

岸本

・ビデオカメラ・コッヘル・ガス・ビール500m2本

時間設定>>>以下の時間設定は日地出版の「白馬・鹿島槍」の1/50000を参考にした。

- ・21日の行動時間は15時間40分
- ・22日の行動時間は10時間
- ・23日の行動時間は5時間10分+交通移動

日程>>>7/20~7/23

行程>>>姫路から扇沢まで500kmを車で移動、20日の5時より入山。20日キャンプは五龍。21日キャンプは白馬。大雪溪を下りバス、JRと乗り継ぎ扇沢着。22日は扇沢でキャンプ。23日早朝より帰姫。

20日

柏原新道扇沢--種池山荘--爺ヶ岳(2669)--冷池山荘--布引山(2683)--鹿島槍ヶ岳(2889)--八峰キレット--五龍岳(2814)--五龍キャンプ場(泊)

21日

五龍キャンプ場--唐松岳(2696)--不帰キレット--天狗山荘(2810)--罫ヶ岳(2903)--杓子岳-(2812)--白馬キャンプ場(泊)

22日

白馬キャンプ場--葱平--大雪溪--猿倉--白馬駅--信濃大町駅--扇沢
エスケープルートは、赤岩尾根、遠見尾根、八方尾根、大出原。

山登りの楽しさを覚えてもうかれこれ5年が経つ。

どれくらいの山々を縦走したことだろう・・・、この後立山の白馬連峰も雪倉岳、朝日岳を残すのみとなった。

下界の創作の色の世界から離脱して大自然の総天然色の世界へ・・・、無限に連なる山々・・・、時の経つのを忘れさず自然の移り変わり・・・、疲れを癒してくれるさわやかな風・・・、常にその瞬間に新しい出会いがある・・・、その魅力にひかれて今また白馬連峰に足を踏み入れている。



コマクサ



五龍キャンプ場の夕暮れ



種池山荘より蓮華岳



タカネツネクサとミヤマキンバエ

この度の縦走は2泊3日の短いものであったが、その中身は非常に濃く初登山縦走の陽介にとっても生涯忘れられない人生の一ページとなったであろう。

主な内容は、

- ・ 初日、二日目とも行動時間が10時間以上
- ・ ブロッケン現象現る
- ・ 雲中を彷徨う必死の五龍への登り
- ・ 天の川&流れ星
- ・ 雷鳥の親子
- ・ 強風&濃霧
- ・ 2km以上に及ぶ大雪渓の下り
- ・ 一期一会

ほんのわずかな期間にきらびやかな衣装を身にまとった山々の喜びが風に揺られて運ばれてくる・・・そんな素晴らしい縦走であった。

ザックの容量は、単独での行動課程と一緒にテントetcすべて私のザックにパックしてあり、総重量はウエストポーチも入れて20kg強である。

陽介は今回が初登山、それもハードなロング縦走なので必要最小限に留めた。

19日

19:30より陽介の大型ワゴン車で一路扇沢に向かった。山陽道・名神・中央道を乗り継ぎ松本で下車。コンビニで食料を仕入れて扇沢の手前の柏原新道登山口に着いたのが1:30。いつ来ても北アルプスへのアプローチは遠くて時間がかかるものである、そのためにも思いっきりエンジョイしたいものである。

大型ワゴンのシートを倒してベッドにすると短時間ではあるが快適な熟睡モードに切り替わる。

20日

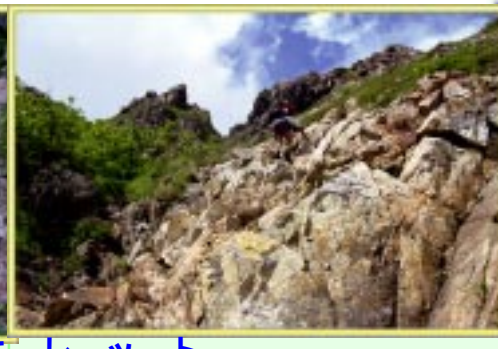
4:30 **起床 快晴**

辺りには20台ほど駐車していてテント、車とそれぞれが我々と同じく仮眠をとっていた。

ゴウゴウと流れる雪解け水で顔を洗い、おにぎりを頬張りいざ出陣！。

5:00 **1350m 8度 登頂開始**

陽介「すでに登っているパーティーが・・・」私「種池小屋までにすべてのパーティーを抜く！」1時間ほど急登の繰り返しをしていると、突然にヤブの中から大猿のつがいが我々の前を横切って、木に止まってこちらを向いて威嚇している。「陽介、目を合わすなよ！野生の猿は怖いから・・・」



八峰キレット

シロウマオウギ

そうこうしているうちに早くも陽介に異変が・・・、両かかるとに500円大の肉刺が・・・、まるで2年前に白山に行った時の早人と同じである。私の頭の中で不安がよぎる・・・あの時は早人は山頂で高山病にやられ嘔吐を繰り返し散々な目になったのである。陽介も2000m以上は未知の世界なので同じようにならないように・・・と心に念じる。

気温もどんどん上昇し、扇沢からガスが立ちこめてきてやがてそれらが雲になり素晴らしい雲海を作り出している。4年前に縦走した針ノ木岳から種池小屋までの美しい山並みに流れるような白い雪渓がひときわ目立ち、朝日がそれらに反射して何とも言えぬ美しい光景である、「風光明媚」そのものである。

陽介も「山溪の世界や！、深田久弥に一步近づいた」と大汗をかきながらも感慨している。

7:30 2450 m 18度 種池小屋到着

朝食の支度に追われて中でバタバタしている様子が外からでもうかがえる。窓から小屋の女の子が「おはようございます、どちらまでですか？」、「五龍までです」、「ええ～、健脚ですねー、頑張ってください」。やはりこの行程はあまり走破するものがない、ほとんどがキレット小屋泊まりらしい。

朝の残りのおにぎりを頬張り爺ヶ岳へと登り始める。途中で雪渓歩きもあり陽介も満足そうである。登り始めて10分もしないうちに槍ヶ岳から奥穂までの穂高連峰が雲上に顔を出している。

8:25 2660 m 18度 爺ヶ岳南峰到着

信州側は2000m以下はすべて雲海で埋め尽くされて荒々しい要塞を思わすかのように黒い尖った山並みが浮かんでいる。鹿島槍相似峰にガスがかかり幻想的な雰囲気をもし出している。富山県側は雲一つなく、八エマツの緑、荒々しい黒い岩肌、流れるような白い雪渓と総天然色で素晴らしい目の保養になる。

9:31 2488 m 18度 赤岩尾根分岐

ドピーカン日和りの快晴ではあるがガスがどんどん上昇してきてついに鹿島槍が雲隠れしてしまった。

9:40 2410 m 冷池山荘到着 小休止

なかなかいい小屋である。何処に池があるかと思えば2m四方の溜まり池であった。

しかし、どの小屋でもそうであるがよくまあこんな切れたった稜線に小屋をを建てたものだと感心する。

登山者もここまでは多数出会ったがここから先の鹿島槍へはほとんど出会わない。

いくつかの雪渓を横切ると、遅咲きの「ショウジョバカマ」が群をなして咲き誇っていた、早速シャッターの挨拶である。

鹿島槍への道のりは途中布引山2683mを登って再び200m下り登り返すというなかなかタフな道のりである。背中の荷物が肩に食い込む。



五龍キャンプ場



五龍岳の夜明け



パテた陽介



ウップルソウ

11:37 2889 m 鹿島槍南峰到着

途中で神鍋マラソンのウエストポーチをした人とすれ違った、2~3会話をいすると我々と同じく姫路からやってきたのだという。八方尾根から入り、唐松、五龍、キレット小屋とすべてを泊まり歩いているのだそうである、実にのんびりと山を楽しんでいる人である。後ほど聞いた話では何と彼は加藤氏の会社の人だったそうである。世間は広くて狭いものである。

陽介もすこしへばってきているようである。「水あるか?」「いえ、あまり無いです」「オレの1.5Lを補給しとけ」「大塚さんは?」「オレはまだ大丈夫や」というふうに陽介はよく水分補給して常に大汗をかいているのである。

『ここからの下りは「八峰キレット」や、気合い入れ直して下れよ。要所要所でカメラに収めるからオレの速度ついてこようと思うなよ、落ちたらケガではすまんからなっ。』

うわさ通りのスリル満点の岩綾地帯である。よくこんな所がルートになっているものだと感心する。

雪彦山であんなにトレーニングを積んだにも関わらず、基本的な動作は同じなのに下りとなるとビビってしまい全

くついてこれない、やはりスケールのでかさに飲み込まれてしまっているのだろう。

鹿島槍北峰はガスにまかれているために登頂せずトラバースする。と、その時はるか向こうにガスの切れ間に荒々しい岩肌がそそり立っている。「陽介、あれがG4, G5, でその向こうが五龍岳や」「とんでもない向こうや」「弱音をはくな」

13:10 2518 m キレット小屋到着 小休止

ここまでのルートはホントにキレットまみれで一瞬たりとも気を抜けないところばかりである。

急なクサリ場を過ぎると、不気味な要塞を思わす真っ黒なキレット小屋に到着である。

冷蔵庫によく冷えているビールを横目に生唾を飲み込んで13:25に五龍に向かって出発。

14:17 2416 m 口ノ沢コル

2500mの稜線歩きは登り下りもありで相当に体力を消耗する。

15:46 G5山頂

このG4,G5はガラガラの直登あり下りありで久々の両手使いで非常に疲れる。

「しかし、五龍の山頂は何処にあるんやっ!」 周り一面が



キレット小屋と五龍岳



唐松手前より五龍岳



唐松岳と不帰キレット



不帰キレットルート



シロウマオウギ

ガスの中でまるで雲中を彷徨っているようである。と、その時上を見上げた瞬間、風でガスが流され山頂の道標が・・・。「陽介見えた、あと2ピッチや、頑張れっ！」、不思議なもので今までの疲れも吹っ飛んでいく、やはり視界があるのとないのでは大違いである。

16:30 2814 m 五龍岳山頂

なんとも手厳しい登りであった。しかし山頂はまたもや360度ガスに包まれて雲中である。

「道標が2つあってキャンプサイトの矢印が違うんやけど、どっちかなあ」、「こういう時に地図とコンパスを出して確認せんかいなっ、癖をつけとけよ！」

17:10 五龍キャンプサイト到着

五龍岳からの下りも急で最後の踏ん張り所であった。やっとのことでキャンプサイト到着である。

今日一日の行動時間は昼食タイムの大休止も無しで実に12時間である。陽介もキャンプサイトに着くとホッとしたのか疲れがドッと出てきたのかへろへろ状態であった。

しかし、どこから人が湧いてきているのか山荘でチェックをしていると、何と「本日は非常に込み合っていますので一畳に3人は覚悟してください」との放送である。当然に食事もタイム制のようである。ほとんどの登山者が我々と逆方向か五龍遠見から来ているのだそうであ

る。

登山届けに「柏原新道～五龍」と書いていると、周りの人も店員もびっくりしていた。「何時間でこられたのですか?」「10時間で来たかったのですが、12時間もかかりました」、「普通は来れませんよ」とのことであった。

陽介にビールや水を買に行ってもらっている間に私はせっせとテント設営で晩飯の用意にかかる。「陽介のザックからジフィーズ4食とビール出して!、これで明日は今日より軽くなるやろ」オレのは全然変わらへんけど・・・。

『明日は10時間行動予定やけれど、大休止のラーメンタイムも入れてお花畑の中をハイキングみたいなものやから今日よりだいぶラクやと思うから・・・、途中で不帰のキレットがあるくらいやけど、まあ大したことないやろ。』

と、そんな話しをしていると、何やら小屋付近で騒いでいるようで、そっちに目をやると、どうやら「ブロッケン現象」が起きているようだ。こちらがガスに向かって手を振ると、見事に反応してくれた。いつ見ても不思議な現象である。

今晚はどうやらガスの中のように、星は全然見ることが出来なかった。テント内では2人とも泥のように眠りついていた。

21日

5:30 6度 快晴 無風 出発

4時過ぎに起床してテント類をパッキング、五龍山荘付近もドッと人が溢れかえり、五龍岳

方面に登っている。我々はその逆の唐松方面へと出発する。

7:35 13度 唐松小屋到着

なんとこの唐松小屋は生ビールの樽が山積みしてある。こんなところで生ビールがあるなんて最近の小屋も近代化したものである。

この5月に来たときは小屋のほとんどが雪に埋まっていたのに、この2ヶ月で跡形もなく溶けている。

7:55 2697m 18度 唐松岳山頂 快晴 無風

360度の大パノラマではあるが、これから行く白馬方面はガスっている、5月の山スキーのことが昨日のように思い出される。「陽介、あれが天狗原で白馬乗鞍で小蓮華、三国境で白馬岳、杓子岳、白馬鍾や、来年に八方に滑りに来たときは滑ってばかりおらんと、じっくりとあの白馬3山を眺めたってくれよ。雪をかぶったらものすごく綺麗やから・・・。」

立山、穂高方面はばっちりと見渡せている。何年か先に実行に移す5月の山スキーツアーのためにも一度は夏道を縦走しておかないと・・・、この盆休みに計画



ミヤマオダマキ



タカネヤハズハハコ



シロウマオウギ

している立山～槍ヶ岳(日本オートルート)の縦走の山並みをはっきりと頭にたたき込んだが、なんとも遠くて長い行程だ。

10:05 不帰キレット通過

まあ、別にたいしたこともなく無事に通過であったが、逆コースからの団体パーティで待つことしきりであった。と、その時陽介がホツとしたのか足を滑らしあわや滑落か!、思わせる1こまが・・・、私とひっついていたので良かったものの滑った拍子に、とっさに左手が伸びて彼のザックのストラップを引っ張っていた。軽い擦過傷ですんでよかったが、どうも下りは苦手なようである。

12:20 2812m 天狗の頭到着

天狗の大下りをのぼり終えて途中に待望の大休止タイムをほどこし、極上のラーメンを食べた。やはり山で食べるラーメンは何故にこんなにうまいものなのか、本当に美味しい。

12:45 天狗山荘到着

ここまで来ればもうお花畑の散歩道である。色とりどり「百花乱舞」に咲き誇って、歩いていてもとても和やかである。昨日とは打って変わってのスローな足並みである。

この天狗山荘はとてもきれいでなんと



白馬キャンプ場と白馬岳

テントサイトまでもうけてあるのには驚きである。水が豊富で雪渓から湧き出ている。シャツを脱ぎ水洗いしてしまった。陽介も水には困らないので大助かりようだ。

最初の設定ではこのコースから下り釜温泉小屋のキャンプサイトに泊まって日本一高々度の露天風呂に入り下山

予定であったが、あまりに短いので白馬までのコースに変更したのである。

13:17 2905 m 鑓ヶ岳山頂

途中、大手原分岐地点・・・そう、ここは3年前に5月に加藤氏と滑り込んだ鑓沢である。ここから鑓温泉目がけて滑り込み（冬場は雪に埋まっている）小日向の科尔から猿倉に滑り込んだコースである。このときもものすごい強風であったのを思い出す。今年は雪が多いせいで今も滑れそうな雰囲気雪渓である。

始めてコマクサを発見した。

13:57 2812 m 杓子岳

信州側がガスっているので杓子岳をトラバースする。ここまで来ればもう白馬はそこに見える。

15:30 白馬キャンプサイト眼前

ものすごい人が大雪渓から登ってきているのが確認出来る。また白馬山荘方面は人がごった返している。日本一でかい山荘でたとえ1500人収容可能でも今日は



白馬キャンプサイト



大雪渓を登る大集団

また昨日の五龍山荘と同じく一畳に3人は覚悟の上だろう。ホントにここが3000mの山の上かと思うくらいである。

テントサイトは丁度お釜の中のようなところである。上から一番隅っこのサイトをチェックする。

15:58 テントサイト到着

受付を済ませるとなんとこの頂上山荘にはレストランがあり、自動販売機まで設けてある。驚いたことにケーキや生ビール、ソフトクリームまで売っていた。ここは一体何処なんや?、と錯覚する。

テントサイトは抜群で石のテーブルに格好のいすまで設置出来た。どうも風が強くなりそうな気配なので今まで張ったことのない細引きを四方八方に張り巡らせた。

今日の疲れは昨日に比べてほとんどなく、快適にビールで乾杯していると、隣に親子がテントを張りにやってきた。しかし、どうも様子がおかしく、別々に寝るのだと言っている。よく聞くと彼女のほうは山荘で泊まるつもりであったが、一畳に3人はとても寝れないと言って、道中で知り合った九州から来た52才のおじさんと行動しているそうである。何も別々に寝らんでも一緒に寝れば・・・どうせどちらもシュラフに潜り込んでいるんやし・・・、で話しは決まったようである。



大雪渓を下る

と、いうわけで晩餐会は4人で盛り上がる。彼女は今日が初めての登山で樽池から縦走してきたという、とてもバイタリティー溢れた埼玉の27才の女の子である。コースこそ違えど境遇は陽介と全く同じである。またスキーも準指の実力の持ち主でシーズンは40日滑っているという。これも陽介と同じである。そこで、山スキーの事やX-Adoventureのことを色々話すと興味津々で聞き入っていた(来年から入門か)。

彼女は明日は釜温泉から下山のコースをとっていた。おじさんは行けるところまで縦走するらしい。

我々もコースを変更してもう一踏ん張りして明日は樽池までの縦走に切り替えることにした。

19:30 就寝

21時ごろトイレに起きると、満点の星空で天の川がはっきりと見ることができた、おまけにその川の中へ流れ星が吸い込まれるように消えていく。日中は百花乱舞で夜はダイヤモンドスターと素晴らしい歓迎である。可愛そうなことに陽介はコンタクトを外しているので何も見えない。

22:00 強風吹き荒れる

このころからものすごい強風に襲われ始める。テントは押しつぶされそうになり陽介がどんどんこっちに寄ってくる。「全然寝られへんわー」、「とりあえず目をつむっとけ、テントは細引きで強化してるからなんとか大丈夫やから・・・」

夜中に起きてみると、そこらじゅうのテントがへしゃがってヘッドライトの明かりがウロウロしているのがわかる・・・みんな大変や。

隣の親子?のテントもいつの間にかフライシートが無くなっていた。



無事に下山

22日

4:00 起床 強風 濃霧

早々にテントを撤収するが、ものすごい強風であつと言う間にテントが凧揚げ状態で簡単にはたたませてくれない。二人でどうにかこうにか撤収に成功。やっぱり今日は大雪渓で下山やっ!。

隣組はまだテントの中にいる・・・彼女もこんな濃霧の中を縦走は出来ないと言って急遽我々と一緒に大雪渓を下ることにする。しかし、早く出てテントを撤収すればいいのにといらつくが、九州人はのんびりとしている。

8:45 1900m 大雪渓途中 コーヒータイム

思っていたとおり、200mも下ればガスから離脱し風も収まっている。しかし、この悪天候に負けず?、ものすごい人数の人が登ってきている。今日も山小屋は超満員だろう。

この白馬連峰がひとたび荒れ狂えば稜線付近はとんでもない強風に見舞われるのはこの5月の山スキーでも味わっている。自然に相反した行動は死につながりかねない。

10:30 猿倉荘下山

猿倉では小雨混じりであった。3人で無事下山の祝杯をビールで乾杯した。

ここからは、白馬駅までバス、JRで信濃大町、扇沢までバスを乗り継ぎ、柏原新道口まで歩きで我々のマイカーにたどり着く。彼女とは白馬駅で別れた。

猿倉からのバスの道中で75才の年輩の人と知り合う。彼は65才から山を始めて70才からスキーを始めたという、そして来年は山スキーにチャレンジと言っていた、とても歳を思わせないバイタリティーある

